

氏名	正 岡 俊 二
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博甲第 1958号
学位授与の日付	平成11年3月31日
学位授与の要件	医学研究科外科系整形外科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	Ultrasonographic Analysis of Shoulder Rotator Cuff Tears (肩腱板損傷の超音波解析)
論文審査委員	教授 平木 祥夫 教授 村上 宅郎 教授 田中 紀章

### 学位論文内容の要旨

本研究は、肩腱板損傷における超音波検査の診断的価値について検討したものである。

超音波検査における術前後の腱板の形態および性状を5段階に分類し、術中所見と比較した。また、腱板の厚さ、肩峰下インピンジメントの有無を術前後経時的に比較した。さらに腱板損傷の診断における感度及び特異度について検討した。

腱板断裂の大きさに関しては、術前超音波所見と術中所見は相関していた。術後短期に多く見られる腱内高エコー像は術後5年以上経過例では認めることが少なかった。術後超音波の観察で再断裂の1例を除き大結節付着部への縫着を確認できた。動的走査下における肩峰下インピンジメント所見は、術前19肩中17肩(89%)に認められたが、術後経過とともに減少し、1年時には全く認められなかった。感度は100%、特異度は94%であった。超音波検査は非侵襲的で動的走査下に検査可能という利点があり、特に肩関節障害に有用で現在はスクリーニングとしての価値が高いことが分かった。将来機器の進歩とともにその診断的有用性はさらに高まるものと思われる。

### 論文審査結果の要旨

従来、肩腱板損傷の診断は主に臨床所見および関節造影で行われている。本研究は、本症における超音波検査の診断的価値について検討した臨床的研究である。超音波検査を行った77例79肩(うち41例43肩に手術施行)を対象として術前後の腱板の形態および性状を術中所見と対比し、また腱板の厚さ、肩峰下インピンジメントの有無を術前後経時的に比較し、さらに本症診断における超音波検査の感度および特異度について検討した。その結果、腱板断裂の大きさの予測は可能であり、感度は100%、特異度94%と高い診断率であることを明らかにした。これらは、本症の診断法に関して重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。